

(5) その他の名所

庄内川沿いには、前項目以外にも多くの名所があります。主なものをあげてみました。

- ① 愛岐トンネル群p464
 - 3号トンネル(登録有形文化財)
 - 4号トンネル(登録有形文化財)
 - 殉職者慰霊碑
 - 旧中央線笠石洞暗渠 (登録有形文化財)
- ② 玉野古道.....p467
- ③ 玉野川溪谷.....p467
- ④ 定光寺駅.....p469
- ⑤ 密蔵院.....p469
- ⑥ 大留城.....p470
- ⑦ 上条城.....p470
- ⑧ 吉田城.....p471
- ⑨ たたらが淵p471
- ⑩ 観音寺.....p472
- ⑪ 小野社.....p472
- ⑫ 十五の森.....p472
- ⑬ 名古屋上水道と尾張広域緑道 p472

松河戸文化科学探求隊
 隊長 長谷川 浩
 080-3657-7052
 松河戸町の沿革ホームページ
<http://matsukawado.com/>

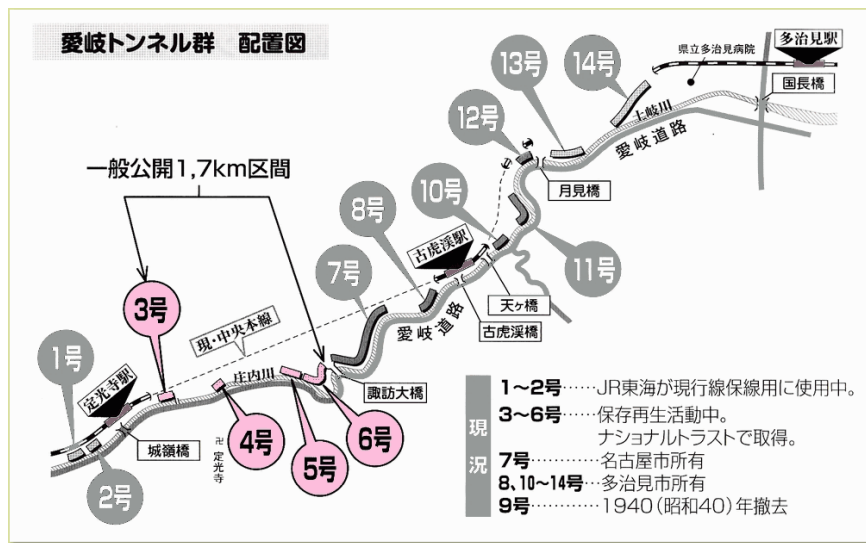
① 愛岐トンネル群

旧中央線(現 JR 東海・中央線)は、明治 25 年(1892)6 月 21 日制定の鉄道敷設法に基づいて建設された名古屋と美濃・信州を結ぶ路線で、名古屋-多治見間は明治 29 年(1896)に着工され、明治 33 年(1900)に開業しました。

廃線区間は、昭和 41 年(1966)の電化複線化と長大トンネルによる新線工事完成で放棄された約 8 キロで、明治期に造られた 13 の赤れんがトンネルが庄内川沿いに残り、明治 33 年(1900)の中央線開通当時(名古屋~多治見間が開通)の面影を残しています。

廃線路は茂った藪の中に埋もれ、人々の記憶から忘れ去られていましたが、平成 17 年(2005)勝川駅の高架化改修工事が行われ、明治の赤れんがプラットホームが撤去された時に、地元の古老のかすかな記憶を頼りに、トンネルの探索が始まって今のトンネル群にたどり着きました。

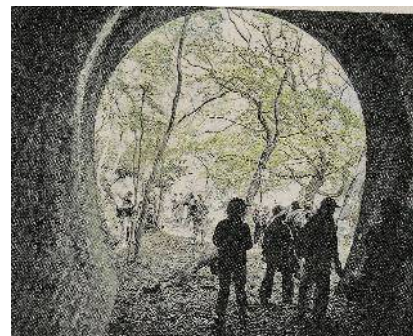
その後、経済産業省「近代化産業遺産」に認定されるなど注目を浴びることとなり、旧中央線玉野第三隧道(3号トンネル)、旧中央線玉野第四隧道(4号トンネル)、旧中央線笠石洞暗渠の3基が、平成 28 年(2016)11 月に春日井市では初めて国の登録有形文化財になりました。



複線電化前		後	
トンネル	長さ	長さ	
1号	104	265	
2号	80	121	
3号	76	愛岐 2910	
4号	75		
5号	99		
6号	333		
7号	607		
8号	202		
9号	撤去		
10号	91		諏訪
11号	296		802
12号	87	原	
13号	262	223	
14号	385	池田町	
		1332	



県下最大級の巨木三四五の大モミジ



6号トンネル

高蔵寺－多治見間は、庄内川沿いに建設されましたが、昭和41年(1966)、名古屋－多治見間の複線電化により、新線に切り替わった定光寺－古虎溪間は廃線となりました。

現在は特定非営利活動法人愛岐トンネル群保存再生委員会が管理しています。

今は定光寺駅から古虎溪駅までと、古虎溪駅から多治見駅までの3つの大トンネルで結ばれていますが、当時は定光寺駅付近から古虎溪駅まで8つ、多治見駅まで5つのトンネルがありました。

春日井市側には6つのトンネルがあり4つのトンネルが数日間限定で春秋などに公開されており、玉野古道沿いに6号トンネルまで行くことができます。



5号トンネルに入るSL

○3号トンネル

3号トンネルは、定光寺駅から多治見方面へ約400mの地点にあります。

断面形状は、明治31年(1898)8月10日付け「隧道定規」で標準断面に定められた明治期の鉄道トンネルの標準的形態(単線の非電化区間を中心に多用)が用いられ、馬蹄形で築造されています。

内部には待避所、側壁に腕木信号操作ワイヤー掛け金具が残り、道床には最大で約90cmの残土が盛られており、坑門及び内壁に補修の跡が見られず、建設時の原形を保っています。

旧中央線玉野第三隧道(たまのだいさんずい)は、平成28年(2016)11月に登録有形文化財になりました。



3号トンネル西坑門正面外観(公開前整備中)

○4号トンネル

4号トンネルは、定光寺駅から多治見方面へ約800m、第三トンネルから約400mの地点にあります。

直線状のトンネルで、断面形状は、第三隧道と同じように「隧道定規」馬蹄形で築造されています。

煉瓦造の坑門は壁柱(坑門の強度を上げるための柱で装飾的な役割も大きい)、笠石(最上部を飾り、装飾的な役割や水切りなどの役目がある)などを備えた官設鉄道用隧道の特徴を示して



4号トンネル東坑門正面外観(公開前整備中)

います。

西坑門上部には煉瓦造擁壁が設けられ、東坑門上部にはレールを再利用した落石防護柵が、山側方面はコンクリート造の擁壁やその上部にレール再利用の落石防護柵が施されています。

旧中央線玉野第四隧道(だいよんずいどう)は、平成 28 年(2016)11 月に登録有形文化財になりました。

○殉職者慰霊碑(旧玉野 1.2 号トンネルの間)

玉野から多治見間は難工事でした。地峡部では断崖絶壁でトンネル 14 を貫いてようやく多治見盆地に出ました。

5 号、6 号トンネルは特に難工事で崩落事故などで多くの犠牲者が出ました。

そこで地元の人たちにより慰霊碑が建立されています。

明治 29 年 11 月着工、明治 33 年 7 月開通、わずか 10 キロの間に 14 のトンネルを掘る難工事であったそうです。

5 号トンネルは高さ 7m の巨岩が崩れ落ち 6 名の犠牲者が、6 号トンネル工事では大雨で西坑門の外の切り取り箇所が崩れる事故が起きました。

1 号、2 号トンネル間には、愛岐トンネル工事で亡くなられた 20 余名のかたの慰霊碑があります。

また、この碑の右には東海自然歩道の入り口があり、ここを上っていくと、上には、玉野園地がありますが、その手前に定光寺ロックガーデンといって、クライミング愛好家の絶好な練習場となっています。



殉職者慰霊碑

○旧中央線笠石洞暗渠^{あんきょ}

笠石洞暗渠は、中央線建設に伴い建造され、定光寺駅から多治見方面へ約 1,100m、第四隧道から約 300m の地点にあります。

煉瓦造アーチ構造の暗渠と煉瓦造立坑からなり、線路の盛土で築堤した際に、沢の水を通すために設けられました。

昭和 32 年(1957)の集中豪雨により土砂で沢が埋まり、暗渠も埋没しましたが、復旧工事では内部の土砂を取り除き、煉瓦造立坑の上部をコンクリート造で継ぎ足して、煉瓦造暗渠と立坑を復活させました。

立坑下部及び暗渠は、建設時の原形を保ち、コンクリート造の立坑上部は、昭和 32 年当時の鉄道施設災害復旧の技術水準を表しています。

旧中央線笠石洞暗渠(かさいしほらあんきょ)は、平成 28 年(2016)11 月に登録有形文化財になりました。



笠石洞暗渠 集水路立坑内

② 玉野古道

多治見から名古屋への街道として、江戸・明治期、内津峠を越える以外に名古屋への道がない多治見の人達の悲願は、平坦な道の確保でした。

この夢を明治28年(1895)玉野街道として開通し、人馬の他、荷車なども通行可能な有料道路でした。

しかし、道路開通翌年の明治29年(1896)年に、中央線の敷設工事が始まると街道は所々で寸断され、たった1年だけの幻の街道になりました。

愛岐トンネル群保存再生委員会では玉野古道の整備を進めており、現在6号トンネルまで(岐阜県境まで)行けます。

近い将来、玉野古道とトンネル(7号と8号)を併用し、古虎溪駅まで散策を楽しめる「フットパス」を考えているそうです。楽しみです。

整備が進められている玉野古道沿いには、4号トンネルの岐阜県側出口にある紅葉は「三四五の大モミジ」と呼ばれる胴回り2メートル前後の幹3本が根元から枝分かれした県内最大級の巨木があります。

また5号トンネルを抜けると右側に河原へ降りる道があります。

10分ほど降りると川が大きく曲がっており、そこには「ピクニック河原」と呼ばれる広い河原がありますが、この先が県境で現在はここまでしか行きません。

その他に、「レンガ広場」、「水車広場」など昔を懐かしく思える設備が整えられています。

郷土史かすがい第76号 登録有形文化財の紹介



随所に残る玉野街道
土留は谷積の石垣



通行道銭の高札

③ 玉野川溪谷

玉野川溪谷は、愛知高原国定公園の西端に位置し、濃尾平野と東濃を隔てる山岳地帯への入口にあります。

豊かな里山の自然を残す庄内川のV字溪谷は、大都市近郊と思えない雄大な景観を楽しませてくれます。

上流の「古虎溪」から鹿乗橋付近までは大きな岩が突き出しています。

定光寺城嶺橋付近は奇怪な岩とそそり立つ溪谷を見ることが出来ます。

山紫水明の豊かな自然に周りを囲まれた山間に、春の桜、秋の紅葉など四季折々の草花の彩りの移り変わりを感じる事が出来ます。

昭和50年頃までは「名古屋の奥座敷」として多くの観光客が訪れ、駅の下には食堂や旅館、土産物屋などがあってにぎわいましたが、モーターレーゼーションの波が起こると遠くに行く人が多くなり寂しくなりました。



左、昭和初期の絵ハガキ

下、昭和36年頃 城嶺橋下流の河原

桜の季節に、奇岩が続く川原に下りて、水音を聞き、川風を感じながらみんなで食べる弁当は格別である。

今は、すでにない千歳楼がみえる。

春日井市広報広聴課



名古屋近辺に住む高齢者の方は、小学校などの遠足で定光寺を訪れた方が多いようです。

もちろん、観光バスのない時代のことで、中央線のSLに乗って定光寺駅で降り、河原で遊んでお弁当を食べ、定光寺にお参りしました。

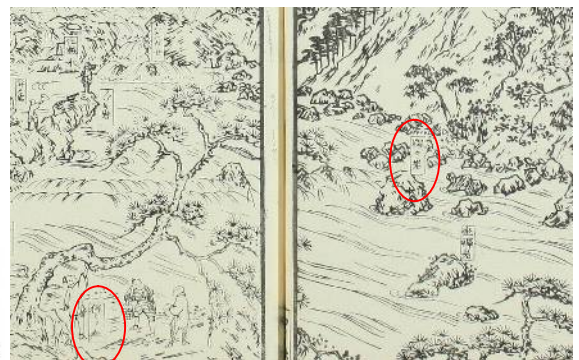
時は移り、駅は無人となり、駅前銀座？は寂れ、大型ホテルは廃墟となりました。しかし、時代の移り変わりを眺めてきた玉野川溪谷には、今も変わらずそこに川が流れています。



出典 尾張名所図会 玉野川溪谷

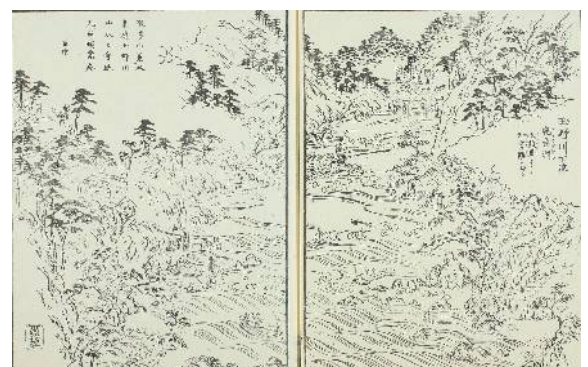
現在の玉野橋辺りから、上流の城嶺橋方面をみる

拡大図



猩々血

猩々岩



出典 尾張名所図会 玉野川下流 鹿乗淵

「春日井むかし話」から 春日井市

猩々岩

—外之原町・玉野町・高蔵寺町—

むかし、外之原町の川平山には、天狗がすんでいました。そして、庄内川をさんだ向こう側、定光寺(瀬戸市)の山には、猩々というものがすんでいました。

猩々は、体は赤毛で猿か犬、顔は人のようで、大きくて力が強く、いつも威張っていました。

ある日、手下のキツネがいました。「うちの山と天狗の山は、どっちが眺めがいいんだらう。天狗はわしの山というてるが。」

猩々は、すぐに天狗に勝負をいどみま

した。

「天狗どの、うちの山からは、伊勢から二河の海までが丸見えですぞ。」

天狗も負けてはいられません。

「お前んどこが邪魔しとるで見えんだけじゃ、どいてくれたら見えるわ。」

「アホ天狗。どけるわけないだろ。お前んどこが動きやええ。うちは伊吹山も見えるぞ。冬の白い伊吹が朝日に輝くさまは本当にきれいだぞ。」

「猩々め、その分伊吹山から吹いてくる超冷たい風がまともだわな。寒寒！」

天狗は背を丸め手をこすり、続けます。

「風といやあ、お前んどこは大風がまともでさんざんだわな。右往左往の大騒動だわな。それに比べてうちは安心だわ。

高いびきで寝とれるわ。」

「なにを偉そに。うちのおかげだがや。」

「くやしけりや、山どけてみろ。」

ああいえばこういう。ついにどっちが強いか腕比べをすることになりました。

「神様の前で、正々堂々とな。」

「それなら、庄内川の鹿乗が溜がええ。」

「次の日、腕力自慢の猩々は早々とやってきました。天狗が来ません。」

(あのヤセ天狗め、恐くなったな)

すると、どこからともなく天狗があらわれきました。猩々はさすが飛びかかりましたが、天狗は岩から岩へと身をかわします。

「逃げるか！ 天狗！」

猩々が天狗をつかまえたと思ったその瞬間、天狗がうらわで「あおぎ。すると猩々は宙高く舞い上がり、ドスン。

猩々は宙高く舞い上がり、ドスン。



「ギャー」

猩々は血を流し、岩から岩へ跳びはねながら、定光寺の山に一目散。その時、血で染まった岩は「猩々岩」といわれています。

④ 定光寺駅

大正8年5月玉野信号所が設けられました。

名古屋開府300年記念として架設された城嶺橋の完成とともに有志や地元民の要望もあり、大正9年8月仮停車場となり、その後昇格請願運動が続けられ、勝川駅、高蔵寺駅に次いで、大正13年(1924)に春日井市3番目の常設駅となりました。

玉野川(庄内川)の溪谷右岸に立地し、川沿いの崖にへばり付くような秘境の趣ある駅です。

名古屋の通勤圏に属しているため、1時間に上下各5~7本程度の列車が往来し、なおかつ車でアクセスも容易です。

なお、駅の所在地は春日井市ですが、川を挟んだ対岸は瀬戸市であり、駅名の由来となった定光寺も瀬戸市側にあり、多くが瀬戸側の利用客です。

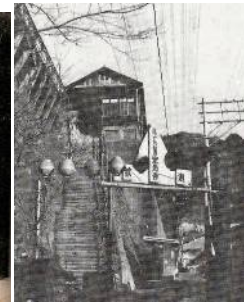
現在は無人駅で、一日乗車人数150人程です。



城嶺橋から見た定光寺 昭和31年



定光寺駅前 昭和40年頃



定光寺駅
昭和41年春日井市
長い階段を上って駅へ

⑤ 密蔵院

密蔵院は、鎌倉時代の嘉暦3年(1328)に慈妙上人によって開山された天台宗のお寺で、戦国時代末期に衰退したものの、寺運盛んな時代には全国に700余りの末寺を有し、



密蔵院多宝塔

寺域には塔頭三十六坊、3千

人を超える修行学侶がいたといひます。

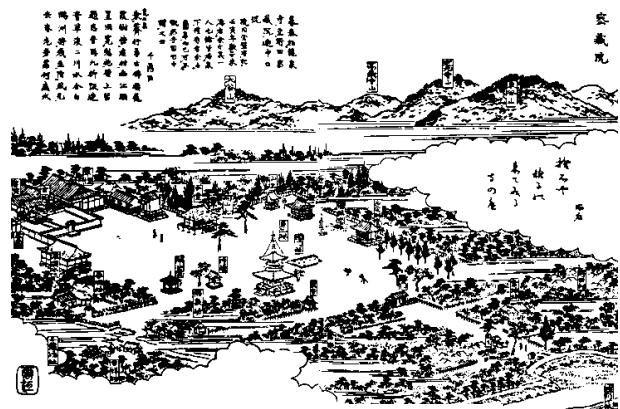
現在、往時の隆盛を偲ばせる建物としては、室町時代初期に建立された多宝塔があり、重要文化財に指定されています。

多宝塔は天台密教系の寺院に多い建造物ですがこれは禅宗の様式を取り入れた珍しいものです。

国指定重要文化財である木造薬師如来立像をはじめ、指定文化財は29件にもおよびます。



密蔵院本堂



密蔵院 尾張名所図会

絵図 対岸の吉根の高みから全景を遠望した図であり、多宝塔の九輪がひとときわ高くそびえている。

庄内川の堤防を下ってすぐのところには総門がある。右手に常林坊、その東に野田村の家並が12棟ほど描かれている。多宝塔、拜殿、本堂、庫裡、書院、鐘楼、宝蔵の伽藍とともに吉祥坊、善明坊、福泉坊などの塔頭がみえる。

中世の最盛期には39坊、末寺は700余を数えたという。ここは葉上流の中核で僧侶に位を授与する寺で、灌頂堂がこの中心施設である。

江戸時代には野田村、田幡村(名古屋市北区)の137石余が密蔵院の領地として認められていたので、將軍の代替わりには朱印状を受けるため、住職が江戸まで出向いていた。

郷土史かすがい第66号 春日井をとる街道から

⑥ 大留城

大留町7丁目の大留橋より上流の子安神明社一帯の地にある。

天分15年(1546)将軍足利義輝の配下村瀬氏が領地に築城し、篠木荘一帯の領主として勢力があった。

天正12年の小牧長久手の戦い時に村瀬作左衛門は篠木、柏井の地侍達と秀吉方の池田恒興軍に参加し、軍を率いて大日渡しより渡河したが、長久手で戦いに敗れて討ち死にし廃城となった。

城域は、南は庄内川に臨み、東は井高谷、西は相模堀、北に堀の松本村より幅6尺長さ650間の用水を設けていた。

この用水は軍事的なものではなく、農業経営者としての村瀬氏の一面をみる事が出来るものである。

現在、子安神明社東側及び本殿裏側に堀の遺構がみとめられる。



子安神明社一帯の地にある大留城跡

郷土史かすがい第6号 戦国の土豪と中世の城館

⑦ 上条城

JR春日井駅南口の西南300mの上条町(二丁目)の老樹が生茂った平地にある。

建保6年(1218)小坂孫九郎光善が佐渡より当地に来て上条城を築城し、一旦近江の国に移り住んだが、その後8世林重之の代にこの地に戻り名字を小坂から林に改姓した。

林家は応永年間(1394~1428)に林重之が上条用水を切り開くなど、代々地元の農業の振興に努めたといわれている。

13世林盛重が上条城の領地を信長に献上し帰農し、城主がいなくなった。

天文23年(1554年)の清洲攻めの際に、当時の吉田城主であった小坂久蔵正氏が清洲城で討死し、世継ぎがいなかったので信長は久蔵の妹の子である前野孫九郎に跡を継がせ、小坂を名乗らせ小坂孫九郎吉宗(雄吉)となり吉田城と上条城も任せられた。

天正12年(1584)、小牧・長久手の戦いで、池田恒興が三河攻撃の足掛かりとして、この城に一時(2日間)入城したと伝えられる。

その際、上条城主小坂孫九郎は出陣し留守で、林盛重の息子14世林重登は道案内をしている。

長久手の戦いの敗戦後、秀吉は自ら兵を率いて龍泉寺の帰りに当館に来て逗留した。

その後秀吉はこの時の賞として重登を小牧街道57カ村の総代名主とした。

羽柴秀吉が休戦と引き換えに吉田城や上条城、小牧にある諸城を取り壊すことを命じたため廃城になり戦いは終結した

天正14年(1586)上条城が廃城になり、天守を始めとした城の建造物は壊されたが、林重登が上条城跡に新たに屋敷を構えた。

林家はこの地で、重登から地租改正で尽力した林金兵衛まで15代に渡って庄屋などを務めた。

城域は東西150m、南北180m、堀、土塁を巡らしたものであった。

現在は、一見して城跡とわかる状態ではないが長屋門が目印となる。



上条城跡の脇にある林家屋敷跡の碑
後方に土塁と石垣がみえる。

⑧ 吉田城

王子製紙の正門南の下条公園(下条町三丁目)の一角に吉田城跡の石碑が一つ建てられている。

明応4年(1495)小坂孫四郎吉政が奉行所として館を建て、そのうちに土塁や堀を築くようになって建物も立派になってきたので吉田城と名乗るようになった。

天文23年(1554年)の清洲攻めの際に当時の城主であった小坂久蔵正氏が清洲城で討死した。

小坂久蔵正氏には子がなく、織田信長は小坂久蔵正氏と遠い親戚であった孫九郎雄吉に跡を継がせ、永禄元年(1558)小坂氏を襲名し吉田城と上条城の城主になった。

小牧・長久手の戦いの際に羽柴秀吉が休戦と引き換えに吉田城や上条城、小牧にある諸城を取り壊すことを命じたため天正14年(1586)廃城になり戦いは終結した。

小坂孫九郎雄吉は、天正18年(1590年)に織田信雄が豊臣秀吉により改易された後は尾張丹羽郡前野村に蟄居している。

現在は本丸があった下条公園に石碑が一つ建てられているだけである。

公園を整備している時に3つの大きな基礎石が発掘されており、現在は小野小学校と下条八幡社に置かれている。

小野小学校の石は戦時中忠魂碑の台石となっていた。



下条公園にある石碑

小野小学校にある基礎石



下条村の村絵図には、同村本郷島に吉田城址があったことが記されている

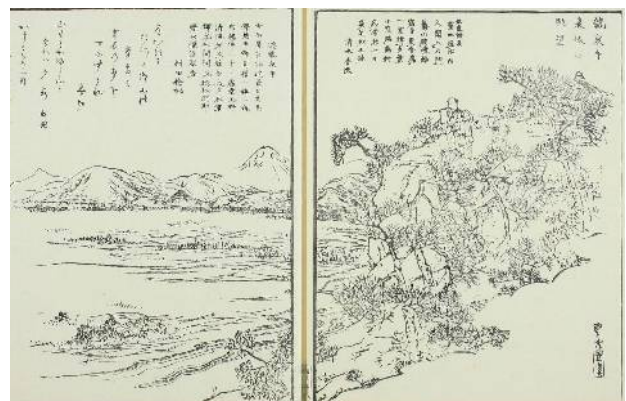
⑨ たたらが淵

上条、下津と龍泉寺の境の庄内川は、古来「たたらが淵」といって青黒く深淵をなしていた。

たたらがの語源は製鉄と関連があるらしく、守山区側に金屋坊(たたらがの守護神を金屋子神という)という地名がある。

地龍泉寺へ渡るのに、たたらが淵の舟の中とか、龍泉寺へ渡ってからとかで、幾多の不思議な事件にまきこまれたという話も伝わっている。

松川橋のあたりから竜泉寺崖下までの庄内川は、今でこそ宅地や墓地で緑がけずりとられてはいるが、かつては深いよどみをもった山紫水明の地で、しかも広い河原もあり、名古屋城下の人士にとっては魚釣りに水遊びにと清遊の地でもあった。



龍泉寺山から眼下の庄内川たたらが淵を望む
尾張名所図会から

⑩ 観音寺

曹洞宗のお寺、

小野道風、十五の森に関係したものが多く保管されている。

【参照 (p218) 8 松河戸の神社仏閣 (2)観音寺】

【参照 (p344) 15 史跡、遺跡、石碑 (3)観音寺内にあるもの】



⑪ 小野社(道風屋敷跡)

県の指定文化財史跡(昭和 29 年 3 月指定)

明治末まで八幡社の境内で境内社として小野社があった。

大正元年に白山社に合祀されたが、戦後昭和 21 年にもとあった屋敷跡に小野社を復帰して小野道風公を祭った。

現在の社殿は戦前の小野小学校の御真影の奉安殿を移築したものである。

【参照 (p287) 11 小野道風伝説】

⑫ 十五の森

市の史跡(昭和 37 年 11 月指定)

今をさる約 530 年前 明応年間に造られた塚の跡で、愛知電機の駐車場の中にある。

占師の言を聞いて 15 歳の娘を人柱として埋めたところで、その後洪水はなくなったと言う。

【参照 (P311) 12 十五の森の悲話】

⑬ 名古屋上水道と尾張広域緑道

ここは、名古屋市民の生命の水である名古屋市上水道が通っている。

名古屋までの 19.5Km という大水路は、明治 43 年(1910)着工し、大正 3 年(1914)に完成し、木曾川の犬山城直下のトンネルの脇(水道の取り入れ口)には、昭和 39 年(1964)に通水 50 年を記念して「水道の碑」が建てられた。

戦前、鳥居松陸軍工廠建設場所に松河戸も候補にあがったが、この名古屋市上水道が通っていたことから上条に決まったという。



庄内川堤防下に立てられている看板

この上(尾張広域緑道)は、松河戸の水田を南北に貫く広い道で、「水道みち」とよんで農作業道として利用していたが、「昭和天皇在位 60 年記念事業」の一環として尾張広域緑道として整備が進められた。

庄内川畔(春日井市松河戸町)から木曾川畔(犬山市)までを結ぶ約 19.5 キロメートルに渡って整備されており、中間地点の小牧市には「フレッシュパーク」という名前のスポーツ関連の施設がある。

なお、この施設はいわゆる"大規模自転車道"には該当せず、所管する愛知県では「公園」と位置づけている。